

かつて海賊だった、
今でもやっぱり海賊な、
いつか海賊になりたいと願う、
全てのひとに贈るポストセクション賛歌！

嵐。深夜のファミレス。
かつて大学の演劇サークルでセクションを共にしたアラフォー男三人。

「僕もねえ、会社に行けばそこそこ忙しい訳だよ。『課長、課長』と言われる訳だよ。」
三流劇団のために、とある海賊の物語を執筆中の脚本家ナンド。
その三流劇団を陰で支える実力者で、脚本完成の見届け役であるアマノ。
劇団の秘密兵器と呼ばれながら、今は芝居を離れている「エスパー」と呼ばれる男。
互いの近況、下ネタ、ミニコント。音信不通になった仲間の思い出…。

嵐。荒れ狂う海。
ドレーク船長率いる海賊船ハインド号。

「我的名はフランシス・ドレーク。この海の支配者、フランシス・ドレークだ！」
世襲海賊のドレーク船長。プチインテリのパール参謀。
「最近のガキにしてはまだ使える方」の下っぱロウ。
ドレークと海を二分して争う女海賊ジャック。
その日捕獲した貨物船に一人取り残されていた女、アマランタが
英雄ではなく悪魔を目指したドレークの人生の歯車を狂わせる。

あるファミレスの一夜と、そこで生み出される物語世界を交錯させながら、
誰も奪う者であり、かつ守る者でもある人間の業を描く。

2009年11月21日(土) 15:00 / 19:00
22日(日) 14:00 / 18:00
23日(月祝) 14:00

銀座小劇場 【地下鉄銀座駅 A13 出口徒歩3分・JR有楽町駅中央口徒歩7分】

前売2300円 / 当日2500円 【全席自由 / 先着順入場】

【チケット予約 / お問い合わせ】 **東京あたふた** Tel:090-2655-0903, URL:<http://www2u.biglobe.ne.jp/~atafta/>

『人は海から離れては生きられない話』

ある夏の日の朝、私は港近くのクリニックの入口に立っていた。幾分緊張した面持ちの私は、人間ドック専用の受付で検査衣を受け取り、着替を済ませて再び受付へ。受付嬢から「中間の液体」を目盛まで採取するよう指導され、採尿室へと進む。

ところが、蒸暑い昨晩から水分補給を絶たれている私の身体は、十分な濃度は確保できるが、大量の放出は期待できない状態にあった。案の定、初垂れは除外したものの、その余の全てを供出することとなったものである。本意ながら厳密な意味での中間部分を抽出できなかった私の冷汗が1滴だけ検体に混入したことを、今ここで正直に申し上げたい。

そして、事件は最後に起こった。3時間にわたる長丁場を得意の妄想で切り抜けつつあった私の前に、新〇結衣似の女医さんが現れ、検査結果を告知したのだ。「尿酸値が高いのでビールはいけません。焼酎にしましょう。」

焼酎といえば「百年の孤独」である。また「百年の孤独」といえば、ガルシア・マルケスのノーベル文学賞受賞作でもある。ノーベル文学賞といえば「老人と海」、そしてマグロである。マグロとくれば「魚影の群れ」か。夏目雅子は本当に艶っぽいなあ。そうか、子供の頃に『西遊記』で刷り込まれたから、いまだに彼女のことを…ブタ？…西田敏行？…釣りバカ日誌？

風向きのせいか磯の香りがする。
妄想の海を漂う私の頭の中に彼女の声が響く。「右の腎臓に結石があります。」

私「おっさんじゃーん！めっちゃおっさんじゃーん！」
彼女「この結石が下の方に降りて来ると、ちんこ石になります。」
私「尿管結石なっ！」

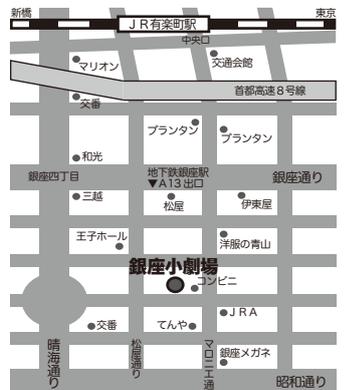
彼女のデスク上のパソコン画面に映し出された私の腎臓の超音波画像の海には、小さな機雷が光っていた。

2009年9月初日 演出家

ファミレス が 海賊 で ビッグステージ

作・・・中出貴也
演出・・・羽田野真男
出演・・・江刺喜政
Qui-Ta
堀真幸
岩井正宣
小島みのり
佐藤絵美
多比良岳史
(TAIRA改メ)
舞台美術・・・江平朝子
(欲深企画)
照明・・・pl.すずきこーた
(演劇デザインギルド)
op. 村雲麻衣
音響・・・pl. 羽田野真男
op. 長山雄作
衣裳・・・佐藤絵美
舞台監督・・・木内鉄也
小道具・・・稲葉谷美穂
制作・・・欲深企画
太田尾暁子

※当日の受付開始は開演45分前、開場は開演30分前となります。
演出の都合上、開演後の入場はお断りすることがあります。予めご了承下さい。また、小学3年生以下の方の入場はご遠慮下さい。



地下鉄丸の内線・銀座線・日比谷線銀座駅 A13 出口徒歩3分 / JR有楽町駅徒歩7分

東京あたふた 東京都立大学（現首都大学東京）劇団時計において1990年から94年にかけて活動した、羽田野真男（演出）とQui-Ta（脚本 / 出演）が中心となって95年に結成した社会人劇団。人間が生きることの滑稽さ哀しさ、たくましさを描くコメディを主に上演している。仕事をしつつ社会人が活動できることを前提に、息の長い活動と質の高い芝居作りを目指す。そのため頻りに公演を重ねるのではなく、各公演に最低半年の準備期間を設け、ほぼ年一回の公演を行っている。12回目を迎える今回は、同じ劇団時計出身で、**東京あたふた**には『ペコ』『サムライパン』を書き下ろしている中出貴也の新作を上演。下ネタも胸キュンも満載、独特の中出節が炸裂するナンセンスにしてポエジーなその作品世界には、固定ファンも多い。

